

キャン ドウ

CanDo アフリカ

特定非営利活動法人アフリカ地域開発市民の会(CanDo)会報 2018 年 12 月[第 85 号]



活動の方向性	マラウイ共和国での NGO 登録が完了	永岡 宏昌
ボランティア便り	マラウイのボランティア市はどんなところ？	永岡 宏昌
活動報告	マラウイでの活動開始に向けた 9 か月の動き	
報告	マラウイの社会的企業 BEEHIVE での研修	飯野ちひろ
報告	2000 年～2018 年に修了した 105 人のインターン	
フォト・レポート	グローバルフェスタ JAPAN 2018	
事務局から		

写真は、マラウイ共和国 NGO 委員会が発行した、当会の NGO 登録証(2018 年 11 月 5 日付)

マラウイ共和国での NGO 登録が完了

代表理事 永岡 宏昌

当会は、2018年3月にケニア共和国での活動を終了し、マラウイ共和国での活動の開始を目指して、準備を行ってきました。この11月5日に、政府機関であるマラウイ NGO 委員会が、当会をマラウイ国内で活動できる国際 NGO として登録しました。日本の NGO が、法人格のないマラウイ支部を開設した形態です。支部として、マラウイ人理事2名と本部の代表理事の永岡の3名で構成する、支部理事会を設置しました。

マラウイ人理事のピーター・カタさんは、ブランタイヤ市にある社会的企業ビーハイブの執行役員で、ビーハイブから独立して幼稚園や初等学校の子どもたちに給食食材を提供する、信託法人 Seibo の代表でもあります。Seibo は日本で特定非営利活動法人として「せいぼじゃぱん」を設立し、給食のための資金集めをしています。

私がせいぼじゃぱんの紹介でカタさんに会ったのは、2016年7月のマラウイ調査でブランタイヤ市を訪問した時でした。それ以来、カタさんにマラウイ社会や人々の気質、非営利活動の動向などについて教えてもらいながら、独自に事業形成調査を続けて、事業地の選定や事業の形が出来上がりました。また、ビーハイブから宿舎や事務所機能の便

宜の提供、通訳の派遣など、側面支援を受けることで効率的な調査ができました。私からは、社会開発の視点の提示や、Seibo やせいぼじゃぱんへの助言など、双方向の協力となるように心がけました。事業の発想は異なっても、マラウイの弱い立場の住民に協力しようとする根幹の部分は共通することを確認しながら、信頼関係の構築に努めました。

その経緯の中で、カタさんに当会マラウイ支部の理事をボランティアでお願いすることになり、承諾を得ました。そして、弱い立場の人に協力する意思がある弁護士のムゾンディ・チランボさんを紹介してもらいました。チランボさんにもボランティアでの理事就任を承諾してもらいました。これにより、事業実施は住民のため子どものためのもの、という中心的価値を共有し、関連する副次的利益を最小化できるマラウイ支部の理事会体制ができたと考えています。また、法務省出身のチランボさんから、2019年5月の総選挙により行政面でも変化があると想定すべきであり、法的根拠が脆弱な法人格のない NGO 登録だけではなく、非営利活動の法人として信託法人*となることが助言され、同じ3名の理事会構成で法人登記手続きも進めています。

* Trustees Incorporation Act (1962) (Cap. 5: 03 of the Laws of Malawi)による。

ブランタイヤ便り

マラウイのブランタイヤ市はどんなところ

永岡 宏昌

当会はマラウイ共和国で活動を開始するにあたり、事務所を首都のリロンゲエ市ではなく、南部のブランタイヤ市に設置することにしました。2015年2月に調査を始めたときから、マラウイのなかでも貧困度が高い南部は、活動する場所として関心がありました。2016年から、その中心地であるブランタイヤが、活動を支える場所としての十分な機能があるのかを検討しました。

インターネットなど通信環境、電気、事務用品・機器店、印刷屋、レンタカー会社、建設資機材の卸売店などが相当数あり、適切な治療を受けられる病院もあることも確認できました。政治の中心がリロンゲエで、経済と産業はブランタイヤと聞いていたとおり、事務所を設置するのに適した場所だと実感しました。また、ブランタイヤは、高原地域の小高い丘にあり、暑すぎず寒すぎない清涼な気候です。

ブランタイヤ市から少し離れてシーレ川が流れています。この川は、アフリカ南東部の大湖マラウイ湖の南端に発して、南部を流れ、モザンビーク共和国に入ってザンベジ川に合流します。ザンベジ川は南東に流れてインド洋に注ぎます。ブランタイヤの町は、1876年にスコットランド国教会が設立したとのこと。

ヨーロッパやインドから来た人々は、インド洋からザンベジ川とシーレ川を遡上する水上交通路をブランタイヤの南、丘の麓のチ



ロモまで形成しました。そして、ブランタイヤの町と鉄道を作っていました。ブランタイヤは、植民地化の中で、ヨーロッパ、インドなどから人々が流入してくる拠点となった場所であり、まだ、実感は乏しいのですが、植民地支配の象徴的な場所でもあります。

ブランタイヤでは、中央市場で豊富な野菜が売られています。他の町では見たことがないネギ、大根、レタスやさまざまなハーブも買えるので、私にとっては、食生活が楽しめる場所でもあります。この市場がもっとも繁盛するのは土曜日です。外国から移住している人たちが、籠をもった使用人とともに買い物する光景をみます。私たちは、植民地時代から蓄積されているブランタイヤの社会基盤を活用することで、仕事の面でも生活の面でも問題のない日々をこれから送らせてもらうこととなります。でも、ブランタイヤの歴史と現在の住民の暮らしにも目を向けたいと考えています。

活動報告 マラウイでの活動開始に向けた9か月の動き

—2018年3月31日～12月23日—

◇人の動き

2018年3月31日、調整員 宇野由起信がケニアから陸路で、タンザニアを経由してマラウイ・ブランタイヤに到着(3月28日、ナイロビを出発)。東京から空路で到着した、代表理事 永岡宏昌と合流(永岡は4月7日、出国)。

5月14日、事務局員 飯野ちひろが、社会的企業 BEEHIVE での研修(p.6 参照)のためブランタイヤに到着(9月11日、出国)。

6月2日、永岡がケニア・ナイロビからブランタイヤに到着(6月9日、出国)。

9月1日、永岡がブランタイヤに到着(11月10日、出国)

10月13日、調整員 大門志織がブランタイヤに到着。



□8月27日

平成30年度日本 NGO 連携無償資金協力申請書(単年度)「パロンベ県教育施設改善に関する初等学校保護者の参加意識の強化事業」が外務省国際局民間援助連携室に受理されました。

□9月12日

マラウイ共和国パロンベ県庁において、県知事と当会との間で活動覚書を締結しました。この覚書を根拠に、中央政府のマラウイ NGO 委員会への NGO 登録を開始しました。

□11月5日

マラウイ NGO 委員会より、当会をマラウイで活動できる国際 NGO と認定する NGO 登録証が発行されました。

□11月17日

ドルとマラウイクワチャの銀行口座を開設しました。

□12月20日

新築の建物で借用する事務所スペースの1つの仮契約をしました(もう1つと本契約は年明けになります)。

報告

2000年～2018年に修了した 105人のインターン

●34人が

国際協力の仕事につきました

○CanDo スタッフ: 16人

○他の NGO 等のスタッフ: 21人

○JICA・政府関係: 7人

…JICA 専門家4人、JOCV 調整員1人、
JICA 国内2人、大使館専門調査員1人

○国連機関: 4人

…UNICEF、国連人口基金、世界銀行、
世界食糧計画(WFP)

○開発コンサルタント: 2人

○うち2人が

アフリカで協力活動を行なう NGO を設立
*内訳は重複を含んでいます。

●1人が

アフリカと関わる会社を起業しました

●12人が

青年海外協力隊員としてアフリカに

…ウガンダ、ガボン、ケニア、タンザニア2人、
ザンビア、ニジェール2人、ベナン、
ボツワナ、マラウイ2人

●11人が

修士・博士課程に進みました

(現在、2人が準備中)

当会がインターン制度を導入したのは、設立2年目の1999年のことです。9月に公募をしました。課題作文のテーマは「アフリカの将来と私」。その後も変わりません。10月、堀内綾さんを2000年4月までの6か月間派遣しました。2000年に派遣したのは、橋場美奈さん、嶋本恭子さん、山脇克子さん、藤目春子さん。この4人と2003年の三木夏樹さんと満井綾子さんの2人は、インターンを修了した後、当会のスタッフになりました。

当会の事業規模は小さく、ケニアでの長期滞在許可が限られます。2004年、インターン制度について、「体験することが、将来の開発協力やアフリカ問題へ貢献する原体験のひとつとなることを制度の意義」と考えました(会報29号「活動の方向性」)。この年と2005年に派遣した8人のうち、7人が国際協力の仕事に就きました。

派遣期間は原則6か月です。2007年末の選挙後暴力から、2013年の総選挙の前は、修了時期を早め、また、2018年3月の活動終了前の派遣では、期間を短縮しました。制度を変更した後の最長は、2015年派遣の松岡由真さんで、延長して11か月でした。

105人の名前を『CanDo20年の歩み』に掲載しています(ウェブサイトの「インターンを終えて」も参照してください)。

マラウイの社会的企業ビーハイブでの研修

事務局員 飯野 ちひろ

■ビーハイブ

2018年5月13日～9月12日の4か月、外務省のNGO海外スタディ・プログラムにより、マラウイ共和国の社会的企業ビーハイブで研修を受けました。Beehive=蜂の巣は、地域の人々の暮らしの質を向上させることをミッションとして、2007年に設立されました。10年ほどの間に10の事業体を立ち上げ、若者を中心に、500人以上を雇用しています。ブランタイヤ市内のチロモニという町に9つの事業体があり、残る1つは市の中心部にあります。事業体のうちマザー・テレサ・チルドレンズセンターと、信託法人 Seibo で主に研修を受けました。他の事業体では、収益事業、若者へのITや裁縫技術の伝達を目的とした学校の運営などを行なっています。

マザー・テレサ・チルドレンズセンターでは子どものケアや家庭訪問、家族への支援のほか、地域住民へ向けた情報伝達セミナーを開催しています。Seiboは幼稚園に給食用食材および器具を供与しています。これらの日々の活動を見学し、スタッフから業務の指導を受け、一緒に活動に参加しながら、チロモニ周辺の地域活性化におけるビーハイブの取り組みについて学びました。また、他の7つの事業体で、それぞれの役割について、マネージャーやスタッフから話を聞きました。

■ピーター・カタさん

ビーハイブの執行役員であるピーター・カタさんから、週に一度、報告と次週の相談を兼ねたメンタリング対話による気づきと助言による自発的・自律的な発達を促す方法—を受けました。その他、歴史や政治からバオ(ボードゲーム)の遊び方まで、マラウイについて幅広く講義を受けることができました。

■ブランタイヤ市から離れて

ブランタイヤ市以外では、Seibo スタッフに同行し、北部の町ムジンバで給食の会議を聞く機会がありました。集合村長、村長、初等・中等学校の校長、保護者代表が子どもへの給食提供で大人が出来ることについて話し合っていました。また、パロンベ県を訪れる機会もあり、教室不足の深刻さを目の当たりにしました。

■4か月を振り返って

自分の思い込みや知識不足を痛感する4か月でした。また、立ちい振る舞いや言動が思いもかけない受け取られ方をされることもあると知りました。地域の人びとと向き合う大変さについて、深く考える機会になりました。

東京事務所で作成する書類に出てくる場所や物を実際に見たことで、事業のイメージが鮮明に描けるようになった、という成果があると思います。

グローバルフェスタ JAPAN 2018

9月29日(土)、東京・お台場センタープロムナードで開かれた、グローバルフェスタ JAPAN 2018に出展。30日は台風24号の状況を考慮して中止となりました。1999年、旧名の国際協力フェスティバルに参加してから20回目。初めて物品は販売せず、テーブルのほとんどをボードゲームのバオで遊ぶ場としました。テントの奥の面には会報の表紙を20枚並べ、横の面はケニアの活動とマラウイの状況を紹介するパネルを展示。



マラウイから飯野が持ち帰ったバオは8マス×4列で、これまでの6マス×2列に比べて1ゲームに時間がかかります。下は、昨年、facebook ページに投稿した案内の写真(コマはなく、バナナ皮動物と空き缶自動車)。



ブース110は会場の外れに位置します。



小雨～大雨～小雨という天候でしたが、のべ14人がバオを楽しみました。小学生の女の子とタンザニア・ルールのバオ歴何十年の男性はスタッフ2人が相手。女性2人が1組、女性と男性が3組(うち1組は母子)、そして男子学生4人。下の写真で、見ている側の2人が遊んで気に入り、2人を連れて再登場。



飯野は、(特活)国際NGOセンター(JANIC)ブースで開かれた「NGO職員によるキャリアセミナー」では、JANIC インターン(右)とのやり取りでこれまでの経験を話しました(オレンジ色のベストはCanDoのブース担当用)。



事務局から

報告 ~2018年12月12日

◇支援

○外務省 NGO 海外スタディ・プログラムによる、事務局員 飯野ひろののマラウイでの実務型研修が終了(5月13日~9月12日の4か月)。

◇広報

○9月29日(土)、グローバルフェスタJAPAN 2018 に出展しました(p.7を参照)。2日目の30日(日)は台風の状況を考慮して中止。

◇講師派遣

○9月29日、(特活)国際協力 NGO センター (JANIC)主催「NGO 職員によるキャリアセミナー」in GFJ 2018 で、飯野が自身の経験を話しました(p.7を参照)。

○12月7日、東洋英和女学院大学大学院 国際協力研究科主催の連続セミナー「持続可能な開発目標(SDGs)の現在」で代表理事 永岡宏昌が講義。SDGs を考える材料となる現場事例として、教育についてケニアの体験と

マラウイの状況を話しました(12月14日、保健について講義を予定しています)。

◇人の動き

○10月12日、調整員 大門志織をマラウイに派遣。

○11月12日、永岡(事業責任者を兼任)がマラウイから帰国。

お詫び

■マラウイでの調査の報告会について

前号でお知らせした、マラウイでの調査の報告会の開催日が、この会報第85号の発行より前の12月19日になってしまうため、誌面での案内ができないことをお詫びします。

お知らせ

■『CanDoの20年の歩み』を発行

2018年末まで20年の活動をまとめた小冊子を会報85号と同日に発行。A5判20ページ。

■次号は2019年3月に発行の予定です。

CanDo アフリカ [第85号]

2018年12月25日発行

発行人:

永岡宏昌

編集人: 佐久間典子

発行:

特定非営利活動法人アフリカ地域開発市民の会 (CanDo)
〒110-0001 東京都台東区谷中2-9-14 第2森川ビル B号室

電話:

03-3822-1041

電子メール:

tokyo@cando.or.jp

ウェブサイト:

http://www.cando.or.jp/

郵便振替:

口座番号 00150-2-15129 加入者名 アフリカ地域開発市民の会